
空の一族 ～羽音の恋～

胡蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の一族 ～羽音の恋～

【Nコード】

N3745P

【作者名】

胡蝶

【あらすじ】

一人の青年には、幼い頃から心を騒がせる音がある。

その意味を探そうと旅を続ける時ある街で一人の少女に出会った。

それは、古からの恋の呪縛と忘れえぬ想い、今再び此处で二人の恋が始まる。

ゝプロローグゝ（前書き）

ゲーム「AIR」の設定を少し借りたオリジナル作品です。
ハッピーエンドに近い悲恋を目指して書きました。

くプロローグく

あれから、いったい何年経ったのだろうか、
君が居ないと分かって居るのに僕は旅を止めることが出来ずに君を
探す。

新しい街に着いた。

駅から出た途端、鳩が空に羽ばたく羽音が俺を襲った。

そこには、もう君が居ないのだと分かっているながらも
僕は振り向かずにはられない。

そこに、君が居るといまだに心の底で僕に知らせる何かがあるら・
・・
もう一度、君に会えるのではないかと、知らせる何かがあるから・
・
振り返られずにられない。

僕は永遠の時の中、羽音の中の君を捜す旅を続ける。

― 続く ―

ゝプロローグゝ（後書き）

初めまして、初投稿です。

HPからの転載作品になっています。

趣味で二次小説など書きながら、オリジナルを書いています。

誤字脱字は、本当に多いと思いますがお許し下さい。

ご連絡受け次第、直して行く所存です。

色々な時代で同じ人物が恋に落ちるお話なのでワザとキャラ名を付けていません。

第一話 「旅立ちの章」

結局、僕は父親の期待を裏切り
跡取りとしても義務を果たすことなく家を出る事になった。

母は、僕のこの行動を予測していたようだった。

それは、幼いころからの僕をみていたから分かると寂しそうに笑った。

僕の幼い時からの癖、

それは、不思議な癖であり、母に言わせれば物心付く前からだった
と言う。

それは、鳥の羽ばたきに振り向き探す癖、幼い時の癖は今でも続いている。

振り向く度心の中の何か僕に囁き急かす早く彼女を見つけると、

そして、僕は旅に出る、

羽音の中の幻の誰かを見つける為に……

― 続く ―

第一話 「旅立ちの章」 (後書き)

まだ、投稿機能がまいち分かっていません。
当分の間、多々ご迷惑をお掛けしながらの投稿になると思います。

第二話 「出会い」

鈍行を乗り継ぎ新しい街に着いた。

駅から出た途端、空に羽ばたく音が僕を襲った。

鳩の羽ばたく音だと分かっているが、振りかえすにはいられない。誰も居ないと分かりながらも……、

しかし、その時、羽音が去った場所に一人の少女が佇んでいた。

鳩にエサをやっていたのだろうか、

エサ袋を片手に持ちながら飛び去った鳩をジッと眺めていた。

憧れと憧憬をその瞳に滲ませながら空と鳩を振り仰いでいた。

彼女は、僕の視線に気づいたのか、僕を見てニッコリ笑うと声をかけてきた。

「怒られちゃうかな？」

「なんで？」

「鳩にエサをあげてると良く叱られるんだ、

でもね、鳩が飛び立つ瞬間が、羽音が好きで止められないの」

彼女は、長い髪をかき上げるようにしながら笑いながらそう言った。その笑みは儚いと言うのだろうか、僕の目にはまるで幻の様に映った。

「そうなんだ、飛び立つ瞬間は兎も角、僕も羽音は好きだよ。

僕の捜している、待っていてくれる人が一番身近に感じる瞬間だ

から」

「待っていてくれる？」

もしかしたら、亡くなったの？」

彼女は、瞬間、悪いことを聞いたと思ったのだろっか俯いた。
僕は、何となく彼女の側に居たいと思った。

彼女が羽音の中で笑う顔を見たいと・・・

―― 続く ―

第三話 「交差」

僕は、彼女の間違いを正す事にした。

「ごめんね、言い方悪かった様だね。

まだ、彼女に会ったこと無いんだよ。

会ったこと無いけど、捜しているんだ、

幼い時から僕の記憶の底にある羽音と共に居る彼女を……」

そう話した僕を彼女は眩しい物を見るように目を細めて見てくれた。

「ロマンチックだね」

「金にならないロマンだから、親に追い出されたよ」

僕は笑いながらそう言った。

今の時代、P C一つで金儲けは出来る時代、

親父に跡取りとして仕込まれた僕は株で金を稼いでいる。

だからこそ、金のありがたみは分かる。

儲かるときは儲かるが、無くなるのは一気だ。

資金はある程度プールしているから、無理しなければ10年は旅が出来る。

当てのない旅は、節約が第一だ。

そんな事を知らない彼女は、

心配そうに僕を見ると良いことを思いついたと言つようにこつ言つた。

「じゃあ、此処に居る間は、家に来たら良いよ。
捜す人見つかるまで此処に居たら良いし」

「男の僕が、君の家に行けるわけ無いと思うけど」

無邪気に子供の様に笑い自分の考えに喜ぶ彼女に僕は現実を突きつけた。

すると彼女は、悲しそうに俯きながら・・・急に泣き始めた。

「・・・誰も居ないもん、

パパも・・・ママも・・・私が・・・要らないから・・・役目果たせないから・・・」

彼女は俯いたまま、涙をぬぐう事もせず、
両手で拳を握りしめながら泣くまいとしているのが分かる。

僕は、黙って彼女を胸に抱きよせた途端、僕のシャツを握りしめワンワン泣き始めた。

駅の出入り口の人通り多い場所での出来事・・・全く困った娘だ。
一時、泣き終わった処で場所を移すことにした。

「此処は、昔よく遊びに来た公園だよ!!」

彼女は、さっき泣いていたのが嘘だったように笑いながらブランコに座り漕いでいる。

「なあ、さっきの役目って？」

僕は、心に引かかっていた単語の意味を聞いた。

—
続
—

第四話 「役目」

「神託」

「しんたく？」

「うん、神子の役目が出来ないの
宗教って言う奴じゃなくて、祭事での役目になるのかな・・・」

「何か、偉く難し事を話すんじゃないんだろうな？」

僕は思わず不味い物に関わったと思った。

宗教関係者は、純粋な分、質が悪いのが本当の処だ。

「私の家は、神社なの・・・」

でね、家の神社はあるお姫様を慰める為に建てられ祭事を行なうの

でも、私はその祭事をする巫女の役目が出来ない。

言葉も作法も動作も全て分かっているし出来るんだけど・・・出
来ない、

結局、最後の祭事の時、式の途中に倒れて祭事を滅茶滅茶にしち
やって・・・

あれは、してはいけない祭事なの・・・心の中の何かが私にそ
う告げるの、

パパとママにそう言ったら家を追い出されちゃった」

彼女は、そう言いなが寂しそうに笑った。

僕は、慰めの言葉も思いつかないままに黙って頷いた。

「なあ、あるお姫様を慰めるって怨霊とかになったのか？」

僕の台詞を聞いた途端、彼女は吹き出し笑いながらその昔話を話してくれた。

― 続く ―

第五話 「神話」

昔々、時代は平安時代くらい

ある村が伝染病で隔離され死に絶えようとしたとき、
村の娘が最後の頼みで神様にお祈りしたの

「みんなを助けて下さい」

その夜に、背中に白い羽を付けた女性が空から舞い降りて
その羽を水に浸し吞ませたら病気がみるみる治ってしまった。

その噂は、一昼夜にして都の帝まで届いたわ、
そしてその後は時の権力者と同じ・・・彼女を監禁し毎日羽を筆
り水を求めた。

でもね、その時彼女は妊娠していたの。

そして、子供を産ませ、その子人質として彼女の元から連れ去った、
もちろん子供も母親を人質として逃げ出さない様にお互いの人質と
していたの

そう二人を別々の場所に人質として軟禁した何年も何十年も、
空があり、羽があるなら逃げる事なんて簡単だったのに・・・。

娘が16になったとき、彼女は母親に会うために空を飛んだ、
そして、矢に射貫かれて死んだ。

彼女の母親には、知らせなかったけど・・・娘の死が分かったの
か自害した。

朝廷はその時になって恐れた。

神から使わされた使者がこの地で死んだことに・・・、

で、私の家が建てられた。

ついでに言うならね。

羽の水を飲んだ帝及び貴族達は、

生きながら身体が腐る病気になって死んだって書いてあったわ。

でも、私はこの話の中にある部分で、母親に会いに行ったと言う処は嘘だと思うの

きつと、好きな人に会う為に羽を広げたんだと思う。

死んでも良い。

ううん、死ぬことでしか結ばれない人だったのかもしれない。

羽のある種族に恋は御法度って書いてあったから・・・

反対に死んで始めて実ったのかもしれないし・・・

彼女は、深い溜め息と共にその昔話をそう結んだ。

― 続く ―

第七話 「運命」

彼女は、最後にそう言葉を結び話終わった。

「恋が御法度つて・・・、どうなるんだ？」

「・・・死んじゃうの、

神様つて、悪人に対しても善人に対しても平等が基本でしょ？

お使いである神子が不公平に愛したら天罰が下るのも、もったも
じゃない」

笑いながらも、何処か悟った様に笑いながら彼女は教えてくれた。

「それでもね、恋をするの、心が求めるの・・・彼が好きだと」

「君が？それともそのお姫様が？」

「・・・内緒」

彼女は、その笑みの中に全ての答えを隠してそう答えた。
最後に何があるのかを全て理解していたのだ。

― 続く ―

第八話 「知られざる事実」

彼女の自宅の客間に通され客分として色々話し、彼女に街を連れ回された。

そんな時間のなか恋と自覚し愛に変わったのは1週間も経たない内だった。

恋に落ちるには時間など関係ないとよく言うがまさにそれだった。

彼女の家には、お手伝いさんがいた。

何でも、幼いころから自分の面倒をみているそうだ。

「巫女として、代わりにその地位についているのは妹ですが……
けて祭事は成功しないでしょう。」

祭事の成功は、血統、血による呪術です。

神官、巫女の直系でないと本当の祭事、呪術は発動しません。

あるのは、只形のための絵空事……、

彼女達はやっと空帰れるのです、その翼を空に羽ばたけるのです」

それは、夕食後のコーヒーを飲みながら3人でもや話をしていた時だった。

何時しか、白き翼の姫君の話になった時の事だった。

僕と彼女は、黙ってその続きを聞きいった。

「私が知っているのは忌まわしき事を隠し綺麗事を書き記した書物からではなく、

彼女に最初に救われた者達が後悔と懺悔によって密かに伝えられた物です。」

祭事の呪術とは、呪い。

時の朝廷は己の野心と利益の為に神の使いであつた者を地に縛り付けた。

彼女達・・・空の一族、空の姫君と言いましよう。

空の姫君が死んだとき何も残りませんでした。

白き羽が散らばり空に溶けて消えたとあります。

その時、朝廷の貴族達は始めて恐ろしくなったのでしよう。

自分とは違う、種族であり神の使いにした行為を・・・でもそれは、遅すぎた。

彼女の母親から羽を雀りとつた者達の末路は想像以上のものでした。

神が下して天罰、それは生き腐れです。

生きていながらジクジクと蛆が己の身体に湧き

腐った肉を食べるのを見ながら、その苦痛を死ぬまで味わうのですから。

しかし、神の許しを貰い輪廻する為には自殺は出来ない。

自業自得とはいえ、その場で死んでしまった方がましな天罰です。

そしてそれは、自分達が崇める生き神でもある帝がその病気になるりました。

神は神をも許さないと言う事・・・

神は、帝を神と認めていないと言う事に・・・貴族達は恐怖にこのきました。

そして最後に当時、最大の陰陽師である呪術師に縋った。

それが、お嬢様の家である神社です。

空の姫の怒りを静めると沈めると言いますが間違いです
朝廷に怒りこの世界を憎んでいるのは空の姫君の母親です。

我が身を地に縛り付け、恩を仇で返し、

我が子を取り上げ殺した・・・十分な恨みになります。

そして、力の持つ者の、その強い思いと恨みは呪いになります」

そこまで、話すと一息付くように醒めたコーヒーを飲み干した。
そんな一瞬の間に彼女は質問を投げかけた。

「じゃあ、家がやっている祭事って呪いってこと？
それにどんな呪いをやっているの？」

その質問に軽い笑みを浮かべながら教えてくれた。

「祭事は、昔かけた呪術の継続を願っているのです。
何を継続するかと言う事は、気候の安定、

空の一族と言う神の使者は伊達じゃ無いって事です。

干ばつ、日照り、大雨、大雪、竜巻、ありとあらゆる大災害をか
の母君は願った。

この地の者が死に絶えれば良いと・・・」

―― 続く ――

第九話 「真実は・・・」

静かな沈黙が辺りを浸した。

僕は、その空気が耐えきれなくなり、乾いた笑いと共に冗談を言った。

「じゃあ、祭事が継続されなくなつて、各地で起こっている異常気象はその影響なのかな？」

「そうでしょうね。」

彼女の祈りが成就されているのかもしれませんが、

呪いを今まで封じ込めていた呪が薄れ表に出てきているのかもしれないません」

そう呟くと、僕と彼女のカップも自分の物と一緒にお盆に乗せかたづけ始めた。

「では、今日はこの辺で失礼いたします。」

明日も、何時もの時間にお食事の用意をいたします」

戸口でそう一言、言い

僕達を少し冷えた空気が流れる部屋に置いて消えていった。

彼女に目をやると、真つ青な顔色をしていた。

最近、彼女の体調が思わしくないのだ。

そして、その日を境に彼女の体調は益々悪くなっていった。僕達の心の想いが重なり合うほど、想いが深くなるほど、

比例するがごとく彼女は体調が悪くなり、生気が無くなっていった。

― 続く ―

第十話 「夢」

あいつと出会い、1ヶ月経った。

僕は、いまだに彼女の客分として客室に身を置いている。

そして彼女は、とうとうベッドから起き上がれなくなった。

見た目は、何も変わっていない、

只、起き上がる体力が無く、医者に言わせれば心臓を動かす機能が狂っているという。

原因は不明、助かるのか、助からないのかも分からないそうだ。

只、分かるのは、

僕とあいつの想いが強くなり強固になるほど、彼女の病状は悪化するようだった。

だが、あいつは只の偶然だと言って取り合わない。

それに、今更嫌いになれないと言って……その夜、俺は不思議な夢を見た。

青白い月明かりの中、桜が散っている。

その風景の中に2つの影があった。

背に羽を付けた少女と若い侍風の男、二人は静に見つめ合っていた。

「主さまにこの地で貴方様と一緒にいられる様に許可を貰いに行ってきます」

夢の中の僕は、何も言えずにあいつをジッと見つめているだけだった。

そんな僕の、頬に手を伸ばし、
ソツと添えると目を覗き込むようにして約束の言葉をくれた。

「此処に、貴方様の側に戻って来ます」

僕は、頬に添えられた手をギュツと掴み、額に押し頂き祈る様に言葉綴った。

「空を、その羽を広げたら、お前は殺される。

俺は矢を放たねばならぬ」

「知っています」

僕は、ハツとして少女を振り仰いだ、その顔はあいつと瓜二つで
・・・ピピピピ・・・ピピピ・・・
無粋なアラーム音が、僕に夢から覚めろと覚醒させた。

頭の奥に残る夢の残像には儚げな笑みを浮かべる少女とダブルあいつが浮かんだ。

それは、死を覚悟した者の顔であり、殉じる覚悟のある者の笑みだった。

― 続く ―

最終話 「何度でも」

ベッドに横たわるあいつは、部屋に入った僕の顔をみて静に笑った。

「思い出しちゃったんだね」

僕は、あいつに駆け寄り抱きしめる事しか出来なかった。

「何故、逃げなかった、

何故、僕に声をかけた、

何故、……」

自分でも何を言いたいのかが分からない。

出てくるのは、疑問ばかりなのだ、

「貴方が幼いころから捜してた様に、私は幼いころから待ってたの、
羽音が懐かしく、天に帰れると分かっていたけど……天に帰
りたくなど無い。

この世界を母は呪った、

呪は私が天に帰ることで昇華され災害も無くなると思う。

でも、貴方に会わないのに帰れるはずがないわ、

そして、逢ってしまったら離れる事など出来なくなってしまう。

何回、何十回も同じ事を繰り返しているのに……心が貴方を
求めるの

死は私が貴方を愛することの罰なら、それを受け入れる。

貴方は私を愛しているなら、愛した私が死することを受け入れて
欲しい。

身勝手だと恨んでくれてもいいの、
私はこうして、貴方に巡り会って恋する事が生まれ変わる事が私の全てだから」

彼は、尚も私を力の限り抱きしめる。

骨よ砕けろと言うくらいに力強く、
言葉に出来ない想いを伝えるように、優しくて不器用な処は変わらない。

「……恨めるはず無い、
只こうして巡り会い、そして別れる。
それが辛いだけだ」

彼の押し殺した声が私の胸を打つ、
私は先に逝く者、残された者の悲しみと長い孤独の時間を体験したことがない。

「ねえ、愛して、
この身体に貴方を刻んで次に貴方に逢うまで忘れないようにして、
私は、貴方と恋をするためにこの世界に存在するの
貴方に会えなくて長生きしたって何の意味はないわ、
そして会えないほど辛いことはない、
恋のために産まれて、恋のために死んでいくのが私の生涯であり
私が選んだ選択」

彼は、尚も私を抱きしめる。
彼の頬に当てた手の平には涙の濡れた感触があった。

「……愛してる。」

僕の白き羽の姫君、きつと僕は永遠にお前の虜だろう。

僕は生まれ変わる度にお前を捜し続ける運命だと思う。

結果が分かっているようにと何処にいてもお前を探し、お前に恋をし、恋を成就させ、

そして愛するが故にこれからも何度もお前を殺すだろう」

長い沈黙の後にキスの音が響き渡った。

続くのは衣擦れ音、男と女のむつまじく吐息にアクセントを付けるかのようにベッドの軋む音

それは、長く短い一日が始まり終わりを告げる音でもあった。

愛してる、

何度でも何度でも貴方に恋をするわ

貴方に逢う為に、恋をする為に何度でも何で生まれ変わる

貴方を泣かせると悲しませると分かっている……貴方以外を選ばないの。

それが、あいつが僕に残した最後の言葉、

そして僕は、あいつに逢うために再び旅に出る。

―― 終わり ――

最終話 「何度でも」(後書き)

HPから転載により一挙に最終話まで掲載です。
と言いつつも、微妙に書き直したりしています(笑

只今、空の一族〰触れる事なき恋〰を執筆中です。
時間系列としては、この〰羽音の恋〰より前の話になります。

HPにUP次第、こちらに持って来ようと思っています。
それとも、HPより先にUPになるかも・・・

HPのURLはマイページに書いてあります。
よろしければ遊びに来て下さい。(・ー・) オジギ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3745p/>

空の一族 ～羽音の恋～

2010年12月13日17時47分発行